

目 次

I 白粉石製石塔·	来待石製石塔の分布と時期	1
はじめに …		1
1. 白粉石製・来	そ待石製石塔の分布	4
(1) 白粉石製石	5塔の分布	4
(2) 来待石製石	5塔の分布	7
2. 白粉石製・オ	· ·	8
(1) 白粉石製石	5塔の時期	8
宝篋印塔		9
五輪塔 …		10
(2) 来待石製石	5塔の時期	12
		12
五輪塔 …		14
(3) 石塔の形態	以变化	16
(4) 石塔の年代	£	18
おわりに …		21
Ⅲ 発掘された主な	は白粉石・来待石製石塔	25
		25
		26
		27
		28
	4 4 5	20
Ⅲ 主な白粉石・来	そ待石の石塔紹介	30
(1) 広瀬・伝尼子		30

(2) 広瀬・伝尼子晴久墓	-
(3)広瀬・堀尾吉晴墓 32)
(4) 広瀬・親子観音石塔	;
(5) 広瀬・祖父谷丁石塔	1
(6) 松江・正林寺古墓群 35	,
(7)松江・堀尾忠晴墓 36	;
(8)玉湯・伝堀尾忠氏墓	;
(9) 玉湯・頼清寺五輪塔	;
(10) 来待・岩屋寺五輪塔・宝篋印塔・板碑群 38	,
(11) 来待・伝大野次郎左衛門墓	ı
(12) 来待・舟山古墓群 40	ı
(13) 宍道・金山五輪塔群 41	
(14) 宍道・荻田古墓42	,
(15) 大東・伝佐世伊豆守墓	
(16) 三刀屋・殿様墓44	:
(17) 平田・小早川正平墓 45	
(18) 出雲・伝塩治氏の宝篋印塔46	
(19) 出雲・尼子義久夫人墓 47	
(20) 出雲・伝宍道氏の宝篋印塔 49	1
あとがき	
[図出典一覧] 50	ļ

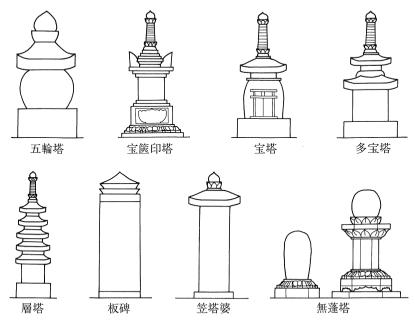
白粉石製・来待石製石塔の分布と時期 Τ

はじめに

宍道町来待地区で産出される砂岩(凝灰質砂岩)は通称「来待石」 と呼ばれ 古くから良質か石材として利用されてきずした。ずた 来 **待石が産出する場所では、もう一種類の石材を採石することができま** す。それは、白い色をした白粉石(石英安山岩質凝灰岩:最近、石塔 の紹介などでは白来待とも呼ばれる石材)です。本書では、この二つ の石材を扱い、いつどのように利用されたかを宝篋印塔・五輪塔を 中心に考えたいと思います。

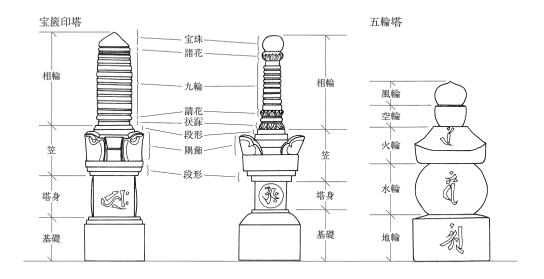
地質的には、来待石の上に白粉石が薄く堆積しており、どちらの石 も石材レーでは軟らかく、加工しやすい特質をもっています。来待石 ・白粉石が利用され始める時期は古く、古墳時代の石室や石棺に使わ れています。しかし、石材として大量に利用されるのは、戦国時代(室 町時代後半)以降となります。全国的にもこの時期にはお墓の墓標と して石塔がたくさん作られるようになります。

石塔にもさまざまな種類のものがありますが(第1図)、本書で扱 うのは、宝篋印塔と五輪塔ですので、その基本的な形を説明しておき ましょう。



第1図 いろいろな石塔

宝篋印塔は、第2図に示したような形をしています。一般的な作りでは、下から基礎、塔身、笠部、相輪の4つの部材からなります。基礎の上部は、階段状に作られて、笠では軒を挟んで上下が階段状に作り出されています。そして、軒の上の四隅には、とても特徴的な萬飾りといわれる突起が作り出されています。来待石では、この隅飾に、草の葉のような独特の模様が入いります。そして、相輪は、下から伏鉢・講花・九輪・講花・宝珠と各部分が、一つの石で作られます。また、基礎から相輪までを作り出す一石宝篋印塔もありますが、その数はあまり多くありません。



第2図 宝篋印塔と五輪塔の各部分

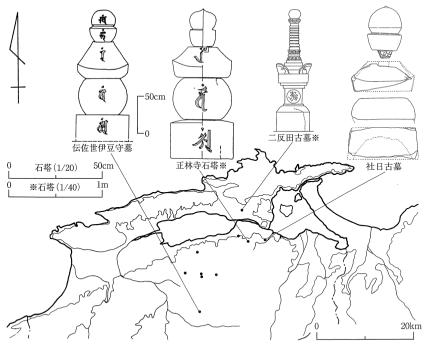
五輪塔も第2図に示したような形をしています。下から四角い地輪、 丸い水輪、やや三角形のような火輪、そして風輪、空輪の部位からな ります。風輪と空輪は、一つの石で作り出されるのが一般的です。そ れぞれの部分を別々の石で作って、五輪塔の形になるものと、一石宝 **篋印塔のように、すべての部分を一つの石で作るものがあります。や** はり、数はあまり多いわけではなく、現在確認されているものは組み 合わせ式のものが一般的です。

1. 白粉石製石塔・来待石製石塔の分布

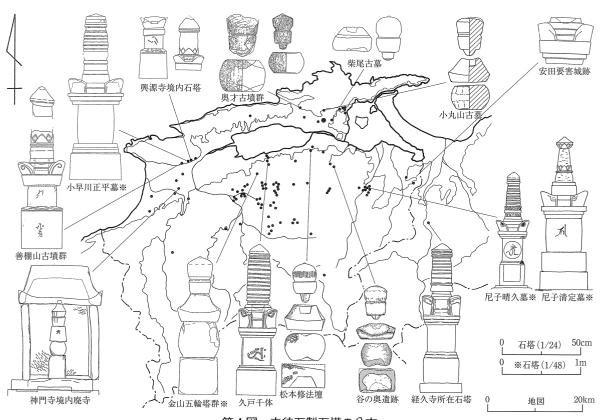
白粉石製石塔と来待石製石塔の分布を示したのが第3図と、第4図です。この分布図は、今まで、各種の調査で紹介さている石塔を記したものです。したがって、実際の分布と多少は異なる部分もあるでしょうが、全体的な傾向は示しているものと考えられます。この分布から、白粉石製石塔・来待石製石塔の様子を見てみましょう。

(1) 白粉石製石塔の分布

白粉石は、先述したように来待石の上に堆積している岩石です。石



第3図 白粉石製石塔の分布

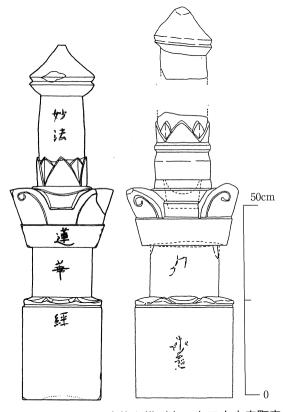


第4図 来待石製石塔の分布

質は、軟らかく、加工は簡単に行える石材です。今、確認されている 分布範囲は、赤川流域(大東町、加茂町)や玉湯町の周辺、松江市内 など、地域的に限られた分布をしています。これは、白粉石の産出す る場所と、その周辺です。白粉石製石塔の年代については、後で詳し

く述べますが、白粉 石を石材として、石 塔を生産していた段 階は、原産地とその 周辺という範囲での 分布であるといえる でしょう。

一方、白粉石の分 布しない出雲平野石 が出雲平野石 がなません。石 がなけての ません。石不 がなすること がないすでできる がなること がないたと考えられたと ます。



第5図 福光石の宝篋印塔(左:大田市大森町字下川原,妙正寺跡石塔)とその特徴を持つ来待石の宝篋印塔(右:出雲市東林木町,善棚山1号墳南端所在石塔)

来待石製石塔の分布 (2)

来待石製石塔の分布は、出雲国(島根県東部)の全域と伯考国(島 取県西部)の西部にまで広がります。来待石で作られた製品は、灯籠 や石仏 唐獅子 (狛犬) など、白粉石に比べて多種類ですが、その中 でも、組み合わせ式の宝篋印塔・五輪塔が多く作られていたようです。 ところで、平田市の一部と出雲市の北部では、来待石製でありなが ら、石見の国の温泉津町で産出される福光石で作られた宝篋印塔の特 微をよつ宝篋印塔が見られます(出雲市膳棚山古墳群所在の宝篋印塔) 平田市興源寺付近の宝篋印塔、平田市国富七つ塚の伝大塚催定募な ど)。これらの石塔の特徴は、隅飾の縁飾りや相輪部に明瞭に見るこ とができます(第5図)。また、部材は、それぞれの部分が組み合わ せになるのではなく、基礎・塔身や、基礎・塔身・笠が一石で作られ たりと、一般的な組み合わせ式宝篋印塔とは異なっています。こうし た石塔の存在は、当時の国を越えた石工(石造物を作る職人)の移動 を考えなければなりません。来待石製石塔の生産と加工・流通を考え る上で、大きな意味を持つ石塔といえるでしょう。

2. 白粉石製・来待石製石塔の時期

ここでは、石塔の年代を考えてみたいと思います。白粉石と来待石の時期を知ることができる石塔を紹介し、その特徴を見つけ出し、石塔の年代を考えてみましょう。

(1) 白粉石製石塔の時期

白粉石製の宝篋印塔・五輪塔は、松江市の二茂田古墓、正林寺古墓、社首古墓などがあります。分布でみたように、原産地とその周辺



第6図 本節で紹介する石塔の位置図

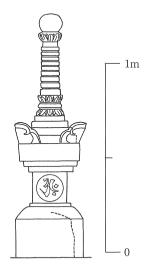
のみの広がりをみせています。

宝篋印塔

白粉石製の宝篋印塔の全体像を知ることのできる資料は、あまり多くありません。そのなかで、二反田古墓(松江市)の発掘調査は、まとまってたくさん出土した石塔の破片から、宝篋印塔の全体の形を復元できる、数少ない事例です(P26参照)。以下、その特徴を書き出してみましょう。

塔身: 梵字を描き、梵字の回りに骨輪と呼ばれる輪が表現されている。

笠部:隅飾突起の縁に草の葉のような表現がある。



第7図 二反田古墓(松 江市)の宝篋印塔

和輪: 請花は重弁で、その花びらの表現がとても入念に作られている。九輪は、深い溝でしっかりと表現されていれ、突帯のように形がしっかりとしている。宝珠の形が、丸みを帯びてきれいな形をしている。

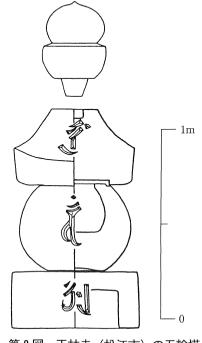
以上のような点をあげることができます。さらに、基礎では、石材 の内部は削り出して空洞にしています。

白粉石製の宝篋印塔は、笠・相輪の作りが装飾的で、作りが細かい 点が特徴です。白粉石製の宝篋印塔は、宝篋印塔の正しい形を踏襲し ており、入念に製作されているといえるでしょう。

万輪塔

白粉石製の五輪塔は、松江市の 正林寺の五輪塔が、全体の部位が 揃っていて、特徴をみることがで きます(P35参照)。五輪塔は、 一般的に、あまり表現部分が細か くないために、変化を追う部位が 多くありません。その中で、空風 輪と火輪は、時間的な変化がよく 現れている部位です。そこで、主 に空風輪・火輪に注目しましょ う。

空風輪の空輪は宝篋印塔と同様に、とても形のいい宝珠形をなし、 風輪は下面がすばまる締のような



第8図 正林寺(松江市)の五輪塔

形状になっています。火輪部分は、軒の上下が反りあがりっており、 曲線的に作られています。

さらに、この石塔の特徴は、石塔の内部(特に水輪)が削り出され、空洞になっている点です。これは、遺骨を石塔内の中に収納するために空洞になっているのか、石塔を運ぶときの移動にかかる労力を抑えるために空洞になっているのかは不明です。当時の五輪塔の作り方の特徴を示しているものと思われます。

また、正林寺の古墓群には、二反田古墓と同様な宝篋印塔の相輪部 分が残されています。同じ石材ということで、白粉石製の五輪塔も白 粉石製の宝篋印塔も同じ頃に製作・浩立された石塔であると考えてお きたいと思います。

正林寺の五輪塔は大型品ですが、松江市社日古墓の五輪塔(P25参 昭) は、小型で一般的なサイズです。破片のみで、全体の組み合わせ がわかるものはありませんが、空風輪の形がよく残っているので参考 になります。空輪部分は丸い形をなし、中には先端が尖るものもあり ます。空輪部分は、最大幅からなだらかにカーブを描いて火輪部分と 接する部分へつながる形となり、これも整った空風輪の形をしている といえます。

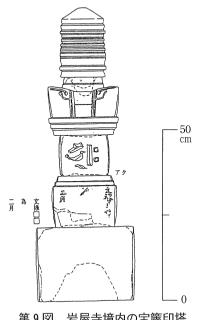
白粉石製の五輪塔も、細部まで入念な加工で形作られていることが わかります。詳しい年代は定かではありませんが、松江市秋鹿の寺の 前古墳群の中に、「…永徳元年辛酉八月廿八日」と地輪に銘の刻まれ た五輪塔があり、「永徳元年」が1381年であることから、14世紀末に は利用されていたものと考えられます。

白粉石製の石塔は石塔としての原型に近く、来待石製の石塔よりも 古く作られたこと、来待石に比べ生産された量が少ないため、限られ た需要に応えた製品であることが考えられます。これについては、来 待石製の石塔を見た上でも詳しく述べたいと思います。

(2) 来待石製石塔の時期

宝篋印塔

来待石製の宝篋印塔は、出雪の 全域や伯耆の西部に多数分布しま す。来待石製の石塔の中にけ 年 号(紀年銘)が彫りこまれた石塔 や、伝承から時期がある程度つか める石塔が数例残っています。そ の刻まれた年代や伝承として残っ ている石塔の形態は、その時代の 石塔の特徴を示しているものと考 えられます。そこで、年代のわか る資料から、その石塔の特徴を見 てみましょう。

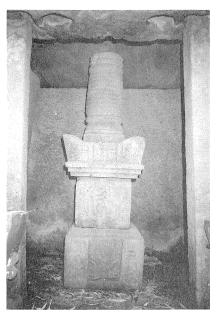


第9図 岩屋寺境内の宝篋印塔

宍道町東来待の岩屋寺所在の宝篋印塔は、基礎部分に「ガ緑□年(三 年か) | という年号の刻まれた資料です(P38参照)。文禄は、1592~ 95年の3年間使われた元号ですので、当時の来待石製宝篋印塔の特徴 を持っていると考えられます。

基礎の上面は階段状に二段作られ、笠の隅飾突起は角ばった方形を なし、外側に開かず直線的に立ち上がっています。隅飾の縁には直線 的な蕨手状の表現が彫られ、軒の縦幅はあまり広くありません。ま た、相輪の九輪部分は、すこし幅の広くやや浅い溝で突帯状に作られ ています。伏鉢や請花は 幅の広 い突帯で表現されており、そこに 花弁の表現は施されていません。 さらに、宝珠の部分は平らな山の ような形となっています。

次に、広瀬町の月山宮荒城内に 所在する親子観音と呼ばれる石塔 は 石龕 (地元では社壇と呼ぶ) という来待石製の平入り客棟屋根 の。覆屋に入った宇篋印塔です。 詳しいことは、後の個別石塔の紹 介に譲るとして、基礎の側面に紀 年銘の彫られた資料です(P33参



親子観音

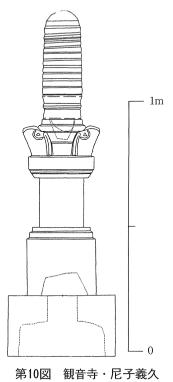
照)。紀年銘は、「慶長・十三□十二月5□」(□は文字の判読が不明な 部分)と刻まれていて、慶長13年は、西暦で1608年を示すことから、 1608年前後の宝篋印塔の特徴を持つと考えられます。

その形態は、基礎上部は2段の階段状に段級が作られ、等部は下に 2段、上に4段の階段状の作りをしていて、軒の縦幅はあまり大きく ありません。隅飾は、やや外側に開いており、縁にはやや簡略された 一蔵手の文様が彫られています。相輪は請花の花弁の表現は施されて なく、九輪部分はかなり浅い溝を作ることでかろうじて突帯で表現さ れています。宝珠はきれいな形ではなく、平らに押しつぶされたよう

な、平らな山形をしています。

石塔自体に年代が刻まれたものではあ りずせんが、『雪陽誌』によると17世紀 の初頭に位置づけられる出雲市渡橋町観 音寺所在の宝篋印塔があります。尼子義 久夫人墓として年代を推定できる宝篋印 塔です(P47参照)。

特徴は、笠部の下側の階段状の段級は 直角に階段状になるのではなく、斜めの 階段状になっています。軒の幅は太くて、 隅飾に施される縁の飾りは、かなり簡略 な蕨手の表現となります。そして、隅飾 突起は、大きく外側へ開いています。相 輪の九輪は、太めの浅い溝を廻らすこと で表現されています。そして、宝珠は平



某人墓

らな餅状になってしまっています。このように、岩屋寺、観音寺、親 子観音の宝篋印塔と比べると、古いものから新しいものになるにつれ て形が崩れ、やや簡略な作りになる傾向がわかります。

万輪塔

来待石製の五輪塔で年代が知られるものには、広瀬町月山富田城内 の岩倉寺の堀尾吉晴墓があります (P32参照)。17世紀初頭の資料で

す。変化が著しい空風輪と火 輪の形態について見てみまし 上う。空風輪は、整った宝珠 の形ではなく、円筒形になり、 先端部分はやや丸くなってい ます。火輪は、軒の上面が四 隅で反っていますが、軒の下 面は直線的に作られているの が特徴です。

このほか、五輪塔で大まか な年代がわかるものでは、発 掘された八雲村谷の奥遺跡の 五輪塔が挙げられます(P27



堀尾吉晴墓

参照)。この遺跡では、検出された墓の副葬品から16世紀の後半から 17世紀の初頭までの間でお墓が作られたと考えられています。発掘調 **杳では多くの五輪塔が出土し、そのなかに、来待石製の五輪塔も含ま** れています。さらに、この遺跡では、石塔の形が分けられ、石材の違 いと五輪塔のプロポーションの変化を追うことができます。以下、報 告書によりながら、空風輪と火輪の特徴を見てみましょう。

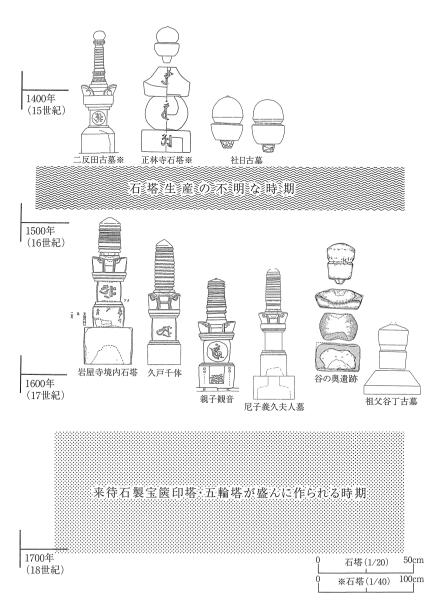
空風輪は、凝灰岩や白色凝灰岩などでは、やや簡略化しながらも桃 のような宝珠の形に作り出されるものがありますが、来待石では、空 輪と風輪部分がやや大きめの溝で区画されるだけとなって、空輪部分 が円筒型になっています。火輪は、凝灰岩製のものは軒の上下辺の隅が反るものや、上辺の隅のみが反るものがありますが、来待石では、 軒の下が直線的で、上辺の隅のみが反るものとなります。

このような中での来待石は、他の石材にくべて、非常に簡略化が進んだ形のものが、遺跡に持ち込まれていることが注目されます。

(3) 石塔の形態変化

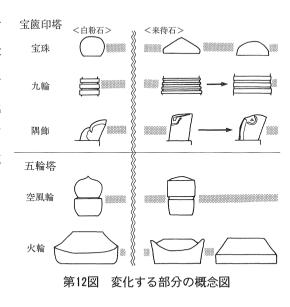
白粉石・来待石石塔の特徴と、来待石については時期が詳しくわかる石塔の特徴をみてきました。あらためて、これらの石塔を年代順に並べたとき、どの部分が、どのように変化しているのか見てみましょう。年代順に並べたものが第11図です。

まず、白粉石製と来待石製の宝篋印塔を比べてみましょう。すると、白粉石の宝篋印塔と来待石の宝篋印塔の間には、似ている要素はありますが、余りにも形が変化しすぎていることに気がつきます。例えば、隅飾突起の縁飾りは、白粉石製のものは、曲線的な草の葉のような飾りを縁に施すのに対して、来待石製のものは、直線的な縁飾りが彫り込まれています。また、相輪の請花部分も白粉石製のものでは、丁寧で花弁の表現がしっかりと作られているのに対して、来待石では、その部分は突帯で表現されていて、何も装飾されないものや、簡略な花びらが彫られるものが見られるようになります。つまり、白粉石製の石塔と来待石製の石塔の間には、同じ特徴を持ちながらも、大きな断絶があると言えるのです。



第11図 白粉石・来待石石塔の変遷図

また、来待石製の石 塔について岩屋寺石塔 (宍道町)と親子観音 石塔(広瀬町)とを記 べてみると、時期かい るにつれて、細かいが るようです。それは、 笠の隅飾突起が徐々に 外に開くことや、相輪 部の九輪の作り出し方



がだんだんと溝が浅く広くなっていく傾向が認められることです。時 代が下るにつれて来待石製の宝篋印塔にも変化が見られるのです。

五輪塔にも同様な傾向が見られます。それは、火輪の軒の部分が曲線的に反るものから、軒自体が直線的なものになることや、空風輪の作りでは、空輪部分が宝珠の形をしたものから、空風輪が円筒状に作られるものへと変化します。

(4) 石塔の年代

白粉石から来待石への石材の変化は、その間を埋める石塔が存在せず、大きな空白があります。しかし、その変化はまったく異なる形の石塔を作るのではなく、ある特徴のうちでの変化です。それは、白粉

石で宝篋印塔・五輪塔が製作され、簡略化していき、来待石の石塔が 出現する頃には、白粉石で作られていたような宝篋印塔のもともとの 規格性は失われ、簡略化した形態になっていることを示しているので しょう。そして、形の特徴から白粉石製の宝篋印塔は古い様相をもち、 来待石製のものはやや雑になることがわかってきました。

では、こうした石塔が、いつ作られたのでしょうか。今の段階では、 白粉石の石塔については、明快に年代を下すことはできません。なぜ

なら、紀年銘を刻まれた資料が少 ないために、年代を決めるのが難 しいのです。そのような中でも、 先述したように(P11参照)、松 江市秋鹿の山の寺古墓群の1例 「妙祐道尼廟世永徳元年辛酉八月 廿八日」という銘を持つ白粉石製 の五輪塔(地輪)の資料が、年代 を考えるうえでの一つの参考にな ります。永徳元年は1381年ですの で、この時期には白粉石製の五輪 塔が作られていたと考えられま す。二反田古墓(P9、P26参照) を発掘した杉原清一氏も、報告書 の中で白粉石製の宝篋印塔の年代



山の寺古墓群「妙祐道尼廟世永徳元 年辛酉八月廿八日」 銘五輪塔(地輪) 拓影(松江市教育委員会『松江市の 埋蔵文化財』1980)

を来待石やそのほかの石塔から推定し、宝篋印塔が造立された時期を 室町時代前半(15世紀初頭)の時期に位置づけられています。

手がかりは少ないですが、白粉石製石塔の作られた時期はだいたい 14世紀末から15世紀代前半と推定できます。今後の研究で更に詳しい 時期を明らかにしていくことが必要です。

来待石製の宝篋印塔の年代については、数例の紀年銘を持つ資料からうかがい知ることができます。最も古い紀年銘資料が岩屋寺石塔の文禄(1592年~1595年)の紀年銘の事例で、この石塔より若干古くなりそうな石塔も多少は存在するのでしょうが、多くの石塔は、文禄年間以降が圧倒的に多いと考えられています。これは、年代のわかる資料の少ない五輪塔にも同じことが言えますので、来待石製の宝篋印塔・五輪塔が多く作られ始めるのが、16世紀末からと考えたほうが自然だと思われます。とすると、白粉石製の石塔と来待石製との間には、形態的に大きな空白が見られたように、年代においても大きく空白が生じていることになります。

つまり、14世紀末・15世紀前半の室町時代前半期に白粉石製の宝篋 印塔・五輪塔は、ごく少数の要求を満たすもので入念に作られたが、 その後、石塔製作は続かなかったと考えられます。そして16世紀末に なると、来待石製の石塔が急増しますが、この現象は、安土桃山時代 に石塔を造立する需要がそれ以前に比べて飛躍的に増え、白粉石の下から大量に切り出すことができる来待石で、石塔が大量に生産される ようになったためと考えられます。 前述したように白粉石製の石塔と来待石製の石塔とには大きな隔たりがあり、その間を埋めるような石塔は確認されていません。この空白期間に他の石材によって石塔への需要が満たされていたとも考えられますが、今後の石塔の編年と石材のあり方を追求していくことで明らかになってくるでしょう。

では、来待石製の五輪塔・宝篋印塔の製作がいつまで続いたのでしょうか。五輪塔はその製作の終焉については、はっきりとわかりませんが、宝篋印塔についてはある程度うかがうことができます。それは、籔川郡斐川町出西にある栖雲寺の池田家墓所や、宍道町白石(才地区)ある川島家墓所の石塔に見られるように、一つの墓所で、宝篋印塔から、位牌のような形をした石塔に変化していくことが確認できるからです。これらは、非常に小さなサイズの宝篋印塔と位牌形墓石が、2基ずつ石龕に納められているものです。位牌型をした石塔には、「元禄(1688~1703)」や「享保(1716~1735)」などの年代が刻まれていることから、元禄・享保の時期には、宝篋印塔から位牌形の石塔に変化したものと推測できます。最終末の宝篋印塔の形は、笠部の外反の度合いがきつくなり、相輪の九輪の表現は細い線で表現されたり、深く太い溝で作られるようになり、石塔が小型になるとともにその作りも、退化しています。

おわりに

14世紀末・15世紀前半の室町時代前半に白粉石製の石塔が作られ

て、16世紀末の安土桃山時代から来待石製石塔の生産が、盛んに行われるようになります。しかし、その間の、16世紀前半の時期については、来待石石塔生産の明確な証拠はつかめなくて、空白の時期が存在することがわかりました。こうした空白の時期に、石塔が必要なくなったとは考えられません。その間の時期は、石塔を造立する要求は来待石・白粉石以外の石材によって満たされてきたのかもしれません。そこで、今後はさまざまな石材を対象として、いつ、どういう種類の石材がどのくらい存在したのかを明らかにすることによって、石塔造立の需要の歴史を復元していく必要があります。

また、石塔の時代変遷を概観したために、石塔の大きさの問題については余り述べることができませんでしたので、ここで簡単に述べたいと思います。来待石製の石塔は、高さ60cm(約二尺)程度のサイズのもが多いのですが、その中に混ざって、その二倍のサイズ、三倍のサイズの石塔が存在します。先述したような、谷の奥遺跡出土の五輪塔は小さなサイズのものであり、堀尾吉晴墓はその数倍の大きさのある石塔です。どちらの五輪塔も、作られた時期は、さほど差はありませんが、サイズが大きく異なっています。このことは、宝篋印塔にも当てはまる事実です。また、時代はさかのぼりますが、白粉石製の五輪塔も同じような現象が見られます。それは、社日古墓では、小さなサイズのものが造立されているのに対して、正林寺五輪塔はその二倍のサイズです。このことは、時期の差ではなく、地域の差でもないので、石塔を告立した人の地位の差を示すものとして理解することもで

きます。大きな石塔の製作には、それなりの労力がかかるとともに、 その運搬にも多大な費用が想定できます。よって、大きな石塔を造立 する背景には、浩立した人の経済力や社会的な地位を考慮に入れる必 要があると考えられます。

来待石製の石塔が広節囲に、また、多量に生産される背景には、お 墓を作る需要の拡大とともに、そうした意識が、さまざまな人々に浸 透していった結果であるといえるでしょう。今後、誰がお墓を作って いたのか、お墓を作る主体となった人々の性格について考えていかな けわばいけません。

石塔はあくまで石で作られた塔婆(仏教で死者の供養のためにお募 の上にたてられる塔で、卒塔婆ともいう。)です。宝篋印塔はいる。 売を見しいう経を納める容器に原形があり、五輪塔は密教の教えで世 界を構成する意味があります。つまり、墓石を建てる背景の根源に仏 教的な要素を持っていることを忘れてはいけません。16世紀末に見ら れる墓石を立てる行為の増加は、そうした意識を持つ人々の増加と関 連して考える必要があります。

墓石としての宝篋印塔や五輪塔も、江戸時代のある時期に位牌のよ うな形に変化します。こうした変化の原因とともに、墓石を立てた人 々と当時の他界観など、石塔にはまだまだ解明しなくてはならない様 々な問題が多く残っています。

(参考文献)

岡崎雄二郎1980「山の寺古墓群」『松江市埋蔵文化財-遺跡分布調査報告書-』松江市 教育委員会

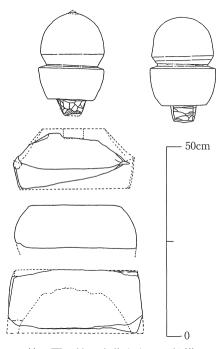
今岡稔1991「山陰の石塔二三について-2-」島根考古学会誌第8集,島根考古学会今岡稔1994「山陰の石塔二三について-3-」島根考古学会誌第11集,島根考古学会今岡稔1995「山陰の石塔二三について-4-」島根考古学会誌第12集,島根考古学会今岡稔1996「山陰の石塔二三について-5-」島根考古学会誌第13集,島根考古学会今岡稔1997「山陰の石塔二三について-6-」島根考古学会誌第14集,島根考古学会今岡稔1998「山陰の石塔二三について-6-」島根考古学会誌第15集,島根考古学会今岡稔2000「山陰の石塔二三について-7-」島根考古学会誌第15集,島根考古学会今岡稔2000「山陰の石塔二三について-8-」島根考古学会誌第16集,島根考古学会外岡稔2002「山陰の石塔二三について-9-」島根考古学会誌第20集,島根考古学会加上昭一2002『谷の奥遺跡』八雲村文化財調査報告書20,八雲村教育委員会杉原清一1996「赤川流域の古石塔探訪」『宍道町歴史叢書』1,宍道町教育委員会杉原清一1987『二反田古墓』,松江市教育委員会

間野大丞2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について-中世末から近世初頭を中心に-」 『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会第2回研究会資料,石造物研究会

発掘された白粉石・来待石製石塔 П

(1) 松江・社日古墓(松江市竹矢町)

集石遺構 (SX01) と平坦面 (加丁壇) から白粉石製の五輪 塔が見つかっています。集石遺 構 (SX01) からは、空風輪の 破片が1点出土し、空輪の形は 丸い玉のような形となっていま す。加工壇2では、残りがあま り良くない、長さ6m、幅1.5 mの長方形の基壇が発見されて います。この基壇からは、もと もと置かれていた位置から動い ていますが、五輪塔が出土して います。



第13図 社日古墓出土の五輪塔

五輪塔は、空風輪が6個、火

輪1個、水輪2個、地輪3個が出土しており、最大6基の五輪塔が建 っていたと考えられます。各部分の大きさは30cm程度で、小型の五輪 塔です。空風輪は、空輪が丸くなり、先端を少し尖らせるものと、丸 いものとがあります。火輪は、軒の上辺が緩やかに上に反り、下辺は



直線的です。水輪の上部に大きぐ 穴が開き、空洞になるものもあり ます。また、地輪は下部がドーム 状に削られていて、同じく空洞に なっています。

石塔の形から、室町時代後半の

戦国時代頃に作られたものだと考えられます。

(文献:西尾克己・伊藤徳広・大庭俊次2001「古代から中世にかけての火葬墓について『社日古墳』,島根県教育委員会)[位置図は1/50,000の地形図を縮小、以下同様]

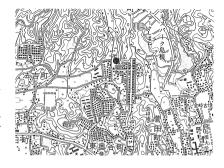
(2) 松江・二茂田古墓(松江市送書町)

松江市常福寺の裏山にあり、宅地開発に伴い、発掘された遺跡で、 尾根の先端に位置します。

山の斜面に、上下2段の平坦地があり、上側と下側のテラスの一部 から、多くの白粉石製の石塔が発掘されています。石塔はすべて宝篋 印塔ですが、いずれも破片で見つかっています。石塔の特徴について

は、前半の白粉石の時期のところ で詳しく述べているために省略し ます。(P9、P19参照)

この遺跡で注目されるのは、下 側のテラスが主に火葬場として使 われていたことです。テラスにあ

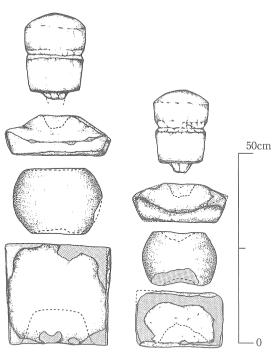


る数個の穴は、どれも火を受けた石や木炭片や火葬骨が見つかり、こ こで火葬を行っていたことがわかります。火葬場と供養のために建て られた募標が同じ場所で確認された例は少なく、珍しい遺跡といえる でしょう。

(文献:杉原清一1987『二反田古墓』, 松江市教育委員会)

(3) 八雲・答の奥遺跡(八東郡 [松江市] 八雲村岩坂)

国道432号の改良 工事の際に発掘され た遺跡です。今は、 道が通り消滅してい ますが、工事前は、 谷の中位に張り出し た尾根の斜面に遺跡 は立地していました。 たくさんのお墓と その墓標となる五輪 塔が見つかっていま す。お墓からは、棺 の一部と考えられる 鉄釘、副葬品の宋銭、 素焼きのⅢ、中国製



第14図 谷の奥遺跡出土の石塔



の染付け皿、唐津焼の皿、毛抜き、 杓杖の頭に付ける鈴輪などの様々 な品が見つかっています。こうし た副葬品から、16世紀中頃から17 世紀中頃の戦国時代末から江戸時 代初頭に埋葬が行われ、墓地とし

て利用されていたことがわかります。

石塔の説明は、来待石製の石塔の年代に詳しいいために、補足にと どめます。ここで出土している五輪塔の石材は、凝灰岩と白色凝灰岩 と砂岩の来待石です。来待石は簡略な作りですが、他の二つの石材は 来待石よりも入念に作られています。16世紀中頃から17世紀初頭に、 この地域の五輪塔に来待石が持ち込まれてきたと考えられます。

(文献:川上昭一2002『谷の奥遺跡』八雲村文化財調査報告20,八雲村教育委員会)

(4) 玉湯・烏坊古墓(八東郡[松江市]玉湯町玉造)

発掘調査で、計3基のお墓が確認され、そのうちの2箇所(2号墓と3号墓)で石塔が見つかっています。どちらのお墓も、四角くい石を積み上げて基壇を造り、その上に五輪塔が置かれていたものと考えられます。2号墓は、基壇の中央に地輪が3基並べて置かれた状態で、3号墓では一つの地輪が置かれていました。また、3号墓の基壇には、五輪塔の地輪を転用したものが含まれていて、基壇内からも空風輪の破片が出土しています。

五輪塔は、 もともとどのように 石塔の部材が組み合っていたかは 不明です。この石塔特徴は、空風 輪の形が、空輪が丸く、風輪もや や丸みを帯びた形状をしていま す。火輪は、軒の上辺が少し反る



だけで、下辺は直線になっています。地輪には梵字が彫られたものも あります。

この五輪塔の作られた時期は、室町時代後半と考えられます。 (近藤正1970『玉浩島坊遺跡群』, 玉湯町教育委員会)

Ⅲ 主な白粉石・来待石の石塔紹介

(1) 広瀬・伝管子経久石塔(能義郡[安来市]広瀬町広瀬)

尼子経久は富田城主で、山 陰に覇をとなえた戦国大名で す。経久の墓石は広瀬の街中 に所在する洞光寺の墓地にあ る大形の宝篋印塔といわれて います(写真の左側)。同寺 は尼子氏の菩提寺で、元は富 田城の北西に当たる釜崑にあ ったとされ、石塔もそこから移さ

れたとのことです。

石塔は来待石製です。しかし、 相輪は失われ、後に、石見東部で 産出された福光石(緑色凝灰岩) の相輪が乗せられています。笠の 隅飾突起は形骸化し、文様も退化 した蕨手のものをもつだけです。 塔身は少し胴が張り、梵字が彫ら れています。





(1) 伝尼子経久石塔(3) 堀尾吉晴墓

(2) 伝尼子晴久墓

(4)親子観音石塔

⁽⁵⁾祖父谷丁石塔

また、北側にある宝篋印塔(写直の右側)は父の尼子清定の石塔と されています。なお、経久は天文10年(1541) に亡くなっていますの で、没年と石塔の型式の差については検討を要します。

(文献:今岡稔1996「山陰の石塔二三について-5-1『島根考古学会誌』第13集,島 根考古学会)

(2) 広瀬・伝陀子晴久墓(能義郡「安来市〕広瀬町宮田)

月山富田城の南側の谷にあたる塩谷 に所在しています。

石で基壇を造り、砂利敷きの上に宝 篋印塔は建っています。尼子晴久は富 田城主で、永禄5(1562)年に城内にお いて49歳で没したとされ、その供養塔と して建立された石塔といわれています。

笠部の隅飾は、やや大きく外側に開 きますが、相輪の九輪の表現は太い溝 で、凸帯状に作られています。そして、 宝珠は扁平ながら、やや脹らみのある



形をしています。笠の隅飾が大きく開く新しい特徴と、九輪の部分が 丁寧に作り出されていることを考えると、石塔の年代は、尼子晴久の 没年よりもかなり新しい特徴を持ち、その告塔年代に一考を要する石 塔といえるでしょう。

なお、地元では尼子経久の墓ともいわれています。(位置図は P 30) (文献:今岡稔1996「山陰の石塔二三について-5-」『島根考古学会誌』第13集,島根考古学会)

(3) 広瀬・堀尾吉晴墓(能義郡[安来市]広瀬町富田)

堀尾吉晴は、関ヶ原の戦い (1600年)の後、吉川広家に 替わり、出雲国の富田城に入 ります。その後、松江城築城 に着手し、慶長16年(1611年) に移りますが、翌年に亡くなっています。



堀尾吉晴の墓は、富田城跡

内の岩倉寺境内奥に所在します。石垣の上に瑞垣を巡らした大きな基壇の上に置かれた総高3m10cmの大五輪塔です。空風輪は円筒形で、火輪の軒線は水平となり、上線のみ隅で反り上がり、近世初頭の特徴がよく示されています。各輪とも四面に薬研彫りで表された梵字が彫られています。

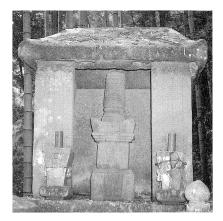
また、石塔の両脇には灯籠が、石垣の前には花立と線香立が置かれ、 さらに、右端には仏像が浮き彫りにされた石柱が建てられています。

なお、堀尾吉晴墓の脇には山中鹿介の供養塔とされる小形の宝篋印 塔もあります。(位置図は P30) (文献:今岡稔1996・1997「山陰の石塔二三について-5・6-1『鳥根考古学会誌』 第13·14集, 島根考古学会)

(4) 広瀬・鎖字観音石塔(能義郡「安来市」広瀬町富田)

月山富田城内に所在します。

江戸時代の初めに、吉川氏に替 わり富田城に入城した堀尾氏に対 し、お家騒動を起こし処罰された 堀尾河内守とその子掃部の供養塔 として建立された石塔と伝えられ ています。そして、この由来から、 「親子観音」と呼ばれています。



石積みの基壇の上に石龕があり、その中に 入った宝篋印塔が納められています。石龕の 外側の壁には、塔婆が表現され、その塔婆一 本一本に文字が刻まれていたようです。今で は風化して、すべてを読むことはできません。 この石塔の重要な点は、基礎部の向かって右



側に「慶長十三年」の紀念銘が刻まれ、年代を示す非常に貴重な石塔 であることです。

石塔の隅飾はやや外側へ反り、相輪の九輪の表現は、細く浅い溝で 表現され、宝珠はつぶれたような形をしています。慶長十三年(1608) 前後の石塔の特徴を示す、基準の資料といえるでしょう。

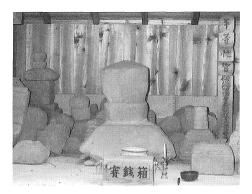
(位置図はP30)

(文献:今岡稔1996「山陰の石塔二三について-5-」『島根考古学会誌』第13集,島根考古学会)

(5) 広瀬・祖父谷丁石塔(能義郡「安来市」広瀬町広瀬)

祖父谷丁石塔は広瀬の街外 れの国道432号沿いに所在し、 今は小さい祠に納められてい ます。

石塔は、五輪塔と宝篋印塔 の部材が35個が存在します。 五輪塔9基、宝篋印塔5基以



上はあったでしょう。石材も砂岩、安山岩、凝灰岩と様々なものがあり、中でも、砂岩の来待石は五輪塔の空風輪2個、火輪1個、宝篋印塔の相輪1個などが認められます。五輪塔は大形品があり、その形態から戦国時代末から江戸時代初頭のものと推定されます。時期的に古いものとしては、台引石製品(福井県若染地方で産出する)の小形の宝篋印塔があり、15世紀後半頃と考えられます。

なお、中世には、東側の平坦地は富田城の麓にある城。安寺が以前に存在した場所といわれていますので、この石塔群は寺院内か、その付近に建てられたものかもしれません。(位置図は P30)

(文献: 西尾克己・樋口英行2004「広瀬・祖父谷丁石塔について」『来待ストーン研 究 15、来待ストーンミュージアム)

(6) 松江・下林寺古墓群(松江市大庭町)

正林寺は、国宝の本殿をもつ 神魂神社と同じ丘陵にあり、 五輪 塔は寺の裏山に位置しています。 幅1.1m、長さ約8.7m、高さ40~ 30cmの基壇上に、4基の白粉石製 の五輪等が建てられ、その他、来



待石製の宝篋印塔や五輪等が集められています。白粉石の五輪塔は、 4 基とも部材が大きく、全ての部分が残るものでは、高さが1.16mと いう大型の石塔です。

石塔の特徴は、空風輪の作りが非常に丁寧で、空輪部は整った宝珠 の形をして、風輪部は椀のような形状をしています。火輪は、軒の端 が上辺では大きく反りあがり、下辺でもやや上に反っています。水輪 と地輪は、内部が大きく刳り抜かれています。このように、正林寺の 五輪塔は、大型でありながら非常に整った形をしており、見えない部 分まで調整を施す手の込んだ作りになっています。特徴から、15世紀 前半の時期に作られたものと思われます。

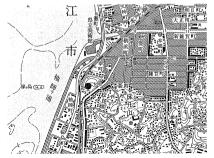
(文献:近藤正1968「正林寺の五輪塔群」『鳥根県文化財調査報告書』第五集,島根県 教育委員会)

(7) 松江・堀尾忠晴墓(松江市栄町)

堀尾忠晴は松江藩主で、1633年 (寛永10)に江戸で没しています。 忠晴には嗣子がなく、堀尾氏は3 代で断絶となりました。堀尾氏の 菩提寺は松江城下の南端にある円 城寺で、忠晴の石塔は裏山の墓地 内に所在します。

石塔は来待石の五輪塔で、玉垣に囲まれています。大形の塔であり、基壇も入れると総高2m80cmになります。近世の特徴を良く示しており、空風輪は大きく、火輪の軒は反りがなく、隅は真っ直ぐになっています。地輪の正面には「寛永十癸酉」、「円城寺神儀」の



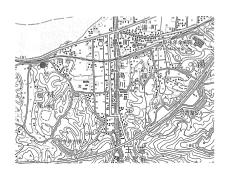


文字が彫られていますが、建立の時期は定かではありません。また、 裏面にも多くの文字が認められます。

なお、水輪は風化が進み、保存処理がなされています。

(8) 玉湯·伝堀尾忠氏墓(八東郡 [松江市] 玉湯町林村)

堀尾忠氏は堀尾吉晴の次子として、関ヶ原の合戦後、出雲国に入部



します。吉晴を継ぎ国主となり、富田城 主となりますが、慶長9年(1604年)。 若くして亡くなりました。

堀尾忠氏の墓と称するものは、 広瀬町 に所在しますが、玉湯町の報恩寺境内に



も堀尾忠氏墓と伝えられる来待石製の宝篋印塔があります。『雲陽誌』 (1717年編纂) によると、江戸初期の報恩寺は十二坊の塔頭をもつ大 寺院で、佐々木、尼子、堀尾、松平氏らの崇敬を受けたとあり、寺に は忠氏がマムシに囃まれ、玉造温泉で治療したが、そこで亡くなった という伝承が伝わっています。

宝篋印塔は来待石製で造られた大型品で、総高約2m70cmです。相 輪、笠、塔身、基礎ともよく残っており、塔身の四方には梵字が彫ら れています。

伝忠氏墓の他にも、報恩寺の境内や裏の墓所では、宝篋印塔を納め る大型の石屋形(石龕)、宝篋印塔、五輪塔を見ることができます。

(9) 玉湯・頼清寺五輪塔(八東郡[松江市]玉湯町林村)



頼清寺は、玉湯町林村にある曹洞宗の寺院です。創立年代は明らかではありませんが、 佐々木頼清が建立したと伝えられます。この

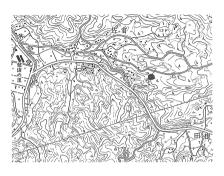
お寺の裏山に頼清の墓と伝えられる五輪塔があります。



五輪塔は、空風輪を欠きますが、高さ約1 m20cmの白粉石製の五輪塔です。銘文は残っていませんが、各輪には薬研彫りの梵字が刻まれています。

(10) 来待·岩屋寺五輪塔·宝篋印塔·板碑群(八束郡[松江市]宍道町上来待)

岩屋寺は真言宗の古刹です。寺の名前のとおり岩が露出しており、多くの石造物がありますが、特に、薬師堂の周辺には多数の来待石や白粉石製の五輪塔・宝篋印塔・板碑が並んでいます。薬師堂



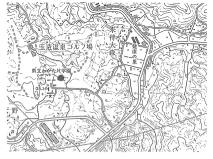
裏の板碑には「慶長12年」、薬師堂脇石窟内の宝篋印塔には「文禄□ 年(三年か)|と刻まれています。いずれも、年号の刻まれた来待石 製品としては、古いものです。

「文禄□年(三年か)」の銘文をもつ宝篋印塔は、薬師堂脇の石窟 内に4基納められたものの一つで、来待石製です。総高79.9cmで、相 輪、笠、塔身、基礎、台座を組み合わせています。表面が傷んでおり、 判読しづらいのですが、基礎石に銘文が刻まれており、文禄年間(1592) ~1595) に作られたものです。類似の宝篋印塔は久戸千体地蔵(宍道 町東来待) 周辺でも確認されていますが、年号がわかるものはありま せん。各部位の作りは簡略化され、大量生産が進んだことがうかがわ れます。

(文献:間野大丞2003「宍道町岩屋寺所在の記年銘のある宝篋印塔について」『来待ス トーン研究』3、来待ストーンミュージアム)

(ii) **来待**·**伝大野次郎左衞門**莫(八東郡「松江市」宍道町西来待)

県立わかたけ学園に隣接して、 大野次郎左右衛門の墓と伝える来 待石製の五輪塔があります。大野 氏は本宮山城(松江市大野町) 周辺に拠点をおいた一族で、戦国 期末期に宍道氏により滅ぼされて



います。また、土御門親王の墓とする言い伝えもあります。

文献等のない中で、建立者や建立目的など定かなことはわかりませんが、五輪塔が建つ大野原と呼ばれる高台は、戦国期の古戦場と伝えられており、何らかの供養塔であったと推定されます。五輪塔の周囲には小さな五輪塔、宝篋印塔もあります。

伝大野次郎左衛門墓の五輪塔は、総高約2m85cmの大五輪塔で、現存する来待石製の五輪塔としては最大級です。空、風輪を一つの石で仕上げ、火輪、水輪、地輪は別々に仕上げ、4つの石を組み合わせています。銘文は残っていませんが、各輪には薬研彫りの梵字が刻まれています。(カラー写真:表紙)

(文献:『宍道町ふるさと文庫-宍道町の文化財めぐり-』2,1989)

(12) **来待·舟山古墓群**(八東郡[松江市]宍道町東来待)



舟山古墓群は来待川を見下ろす舟 山と呼ばれる丘陵上にあり、大型の 五輪塔、宝篋印塔があり、A群、B 群として紹介しています。



A群五輪塔は、標高約27mの丘陵(字舟山)北側にある来待石製の 五輪塔です。自然地形を加工した一辺約5m. 高さ約1mの基壇をも ち、そこからは来待川の河口と宍道湖を見おろすことができます。五 輪塔は空 風輪を欠きますが、現存する火、水、地輪は組み合わせに なっており、高さは122cmの大型品です。各輪には薬研彫りの梵字が 刻まれています。

B群五輪塔は、A群五輪塔の約20m南にある来待石製の五輪塔です。 A群五輪塔と同様、空、風輪を欠きますが、火、水、地輪は組み合わ せになっており、高さは126cmを測ります。銘文は残っていませんが、 各輪には薬研彫りの梵字が刻まれています。

(文献:西尾克己・稲田信1996「宍道町・舟山古墓群について」『宍道町歴史叢書』 1, 宍道町教育委員会)

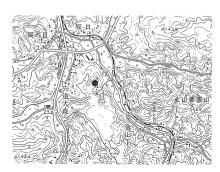
(13) 宍道・金山五輪塔群 (八東郡 「松江市」宍道町百石)

金山五輪塔群は豊龍寺(字 金山下)の北側、金山共同墓 地に隣接しており、2基の大 五輪塔を含む古墓群です。元 は経慶寺と呼ばれる寺院の 敷地内で、今でも小字「経慶 寺」が確認できます。2基の 五輪塔を、地元では田仏さ



んと呼んで、体にできたイボが除かれると、お参りがあったようです。

1号塔は一辺約7.5mの正方形 で、高さ約1mの基壇をもち、石 塔はその中心に置かれています。



五輪塔は空・風輪を欠き、火輪は石塔の脇に転落していますが、水、 地輪は元の位置と考えられます。地輪から火輪までを復元すると、総 高は約1m35cmです。各輪には梵字が刻まれていたのでしょうが、風 化が激しく、判読できませんでした。

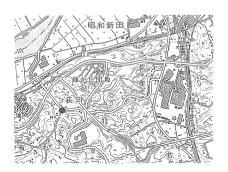
2号塔は総高約176cmの来待石製の五輪塔で、空・風・火・水・地輪とも良く残っています。各輪には薬研彫りの梵字が刻まれています。

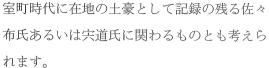
2 基の五輪塔は誰のためのお墓、あるいは供養塔かは記録に残っていませんが、室町時代に宍道地域を中心に勢力を保った宍道氏一族のものと考えられます。

(文献:西尾克己・稲田信2004「宍道・金山五輪塔群について」『来待ストーン研究』 5,来待ストーンミュージアム)

(i4) **宍道・荻田古墓**(八東郡[松江市]宍道町佐々布)

荻田古墓は総高約1m70cmの来待石製の五輪塔で、空・風・火・水・地輪とも良く残っています。各輪には薬研彫りの梵字が刻まれています。誰のためのお墓、あるいは供養塔かは記録に残っていませんが、







(15) 大東・伝佐世伊豆약墓(大原郡[雲南市]大東町下佐世)

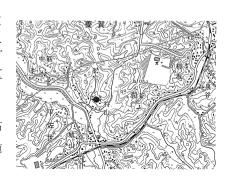
大東町下佐世の狩山八幡宮 境内に伝佐世伊豆守墓五輪塔 があります。狩山八幡宮につ いては佐世城城主佐世伊豆守 幸勝が八幡宮を勧請したと伝 えられ、神社の西南の丘陵に は佐世城があります。



五輪塔は左右に2つ並ぶ白粉石製の五輪塔で、伊豆守父子のものと 伝えられています。正面右側の五輪塔は総高約1 m80cm、左側の五輪 塔は総高約1m40cmで、一部は破損し、来待石などで補っていますが、 比較的良く残されています。各輪には薬研彫りの梵字が刻まれていま

すが、いずれも銘文は残っていません。2基の五輪塔の他にも、五輪塔や宝篋印塔の一部が周囲に重ねられています。

(文献:杉原満一1996「赤川流域の古石 塔探訪」『宍道町歴史叢書』1,宍道 町教育委員会)



(16) **三刀屋・殿様墓** (飯石郡 [雲南市] 三刀屋町 給下)





三刀屋川左岸の低丘陵上に位置 する県指定の松本古墳群の東側に 所在します。丘陵中腹にあたり、 同安寺と呼ばれる古い寺跡の平坦 部の奥にあります。

現在、石垣の基壇上に、2個の



来待石製の石龕が置かれています。石龕の壁には塔婆形の文様が彫られ、それぞれに空風火水地の文字と四十九院名が刻まれています。また、西側のものには石の扉が残っています。

石龕には、来待製の宝篋印塔が各2基納められています。基壇に据えられた立派な石塔であり、古くから三刀屋城主との関係が云われ、地元では「殿様墓」と呼ばれています。石塔は残りが良く、相輪や笠の形態から石塔の時期は16世紀末から17世紀初め頃のものと考えられます。

なお、周りには、無縫塔や小形の宝篋印塔が数基存在しています。 (文献:伊藤菊之輔1965『出雲の石造美術』)

(17) 平田・小早川正平墓(平田市「出雲市」美談町)

国道431号から北へ200m程入った低丘陵の麓に宝篋印塔が建てられています。地元では「小早川さん」とよばれており、天文12年(1543)に大内義隆の尼子攻めに加わり、この地で討たれた備後(広場所)の豪族小早川正平の墓と伝えられます。



宝篋印塔は来待石製で作られた大形品で、総高2m程です。相輪、 笠とも風化が進み、苔むし、九輪下部で折れセメントで接合されてい ます。塔身は風化せず綺麗であり、後世の補修時のものと考えられま す。四方には梵字が彫られています。なお、塔には、文様が少なく、 相輪の宝珠の下にある請花が認められるだけです。

この石塔の時期は、相輪や笠の形態より16世紀後半から17世紀初めのものと推定されます。石塔の東150mには小早川正平の菩提寺とされる臨済宗興源寺があり、正平の2代後の当主小早川隆景(毛利元就の三男)が創建したと云われ、この石塔も前後して作られたものと推定されます。

なお、石塔の左右には小早川正平と共に討たれた従者7人の石塔も 置かれています。

(文献:西尾克己・樋口英行2004「平田・小早川正平墓と興源寺周辺の石塔について」 『来待ストーン研究』 5,来待ストーンミュージアム)

(18) 出雲・伝塩冶氏の宝篋印塔(出雲市塩冶町)



この石塔は禅戸川右岸の島根大学医学部北側の微高地にある禅門寺に所在 します。境内の出雲霊場五番の観音堂



北西側にある墓地内に、高さ2m程の大きい宝篋印塔が2基が並んで います。現在は、覆屋が建てられています。また、石塔の背後には、 小形の宝篋印塔が3基程集められています。

石塔は永く屋外にあり、相輪をはじめ各部分は風化が進んでいます。 塔身には梵字が彫られていますが、装飾は笠の隅飾りに少しある他は あまり認められません。

2 基とも相輪、笠が同じ型態であり、安土・桃山時代から江戸時代 初めに作られた石塔と考えられます。中世にこの地域で勢力を有して いた塩冶氏一族の墓ともいわれています。塩冶氏の時代と石塔とは時 間差がありますので、後の供養塔とも考えられます。

なお、境内の南西隅には凝灰岩製の五輪塔が1基存在します。出雲

国守護で、南北朝動乱期に非業の死を遂 げた塩冶判官高貞の墓とされています。

(文献:今岡 稔2000「山陰の石塔二三について - 9 - | 『島根考古学会誌』17, 島根考古学会)

(19) 出雲・尼字義久夫人墓

(出雲市渡橋町)

尼子義久夫人の墓は、出雲平野中央部で 国道9号沿いの観音寺境内に所在します。 富田城主尼子義久の夫人は永禄6年

(1566) の尼子氏滅亡後に尼(円光院)



となり、『雲陽誌』によると、観音寺で慶長15年(1610)に亡くなっています。墓は出雲霊場4番の観音堂の裏手にあり、来待石製の宝篋印塔で造られ、総高1m37cmです。今は覆い屋で保護されてお



り、相輪、笠、塔身とも風化せず、保存状態は良好です。塔には、文 様が少なく、笠の隅飾突起に退化した蕨手の文様をもつだけです。

この石塔の時期は、慶長年間以降のものと推定されます。17世紀初めの宝篋印塔の形態を知る手がかりとなります。

なお、観音寺の墓地には、他に石龕に入った小型の宝篋印塔が数基 認められます。

(文献:間野大丞2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔についてー中世末から近世初頭を中心に一」『石造物研究会 第2回研究資料-来待石を中心とした日本海文化ー』石造物研究会・来待ストーン客員研究員会)

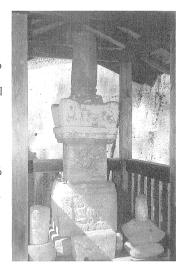
(20) 出雲・伝宍道氏の宝篋印塔

(出雲市西林木町)

出雲市西林木町の霊雲寺本堂の裏にあ る宝篋印塔は宍道氏の宝篋印塔として知 られ、地元では宍道政慶の墓(供養塔) あるいは政慶の父降慶の墓(供養塔)、 と伝えています。現在は霊雲寺境内にあ りますが、寺伝では寺の西側(字上屋敷) にあったものを移したと伝えます。

石塔は来待石製の宝篋印塔で、相輪、

笠、塔身、基礎、台座を組み合わ せており、総高は約1m70cmです。 今は覆い屋で保護されており、保 存状態は良好です。塔身の四方に 梵字が彫られています。





※ 石塔紹介では、市町村合併後の新市名を「] で併記しました。

あとがき

これまでの発掘調査により、来待石製石塔の資料が増えてきています。また、今岡稔氏による継続的な石塔の紹介と杉原清一氏による地域の網羅的な石塔調査によって各地における様子が知られ、2001年に来待ストーンで行われた石造物研究会において間野大丞氏によって来待石製五輪塔・宝篋印塔の変遷の様子が明らかにされてきました。こうした経緯の中で本書は、これまでの研究成果をまとめたものです。その内容を十分凝縮できていない部分もあるかと思いますが、今後の石塔調査の参考になれば幸いです。

なお、本書をまとめるにあたり西尾克己氏・稲田信氏には石塔紹介 の部分を分担していただきました。また、白粉石の石塔の年代に関し ては、岡崎雄二郎氏から多大なご教示を得ました。

最後に、本書の執筆機会を与えていただいた宍道町蒐古館、協力いただいた来待ストーンミュージアム、出雲玉作資料館に厚く御礼申し上げます。

[図出典一覧]

- 第1図 川勝政太郎1967『石造美術入門 歴史と鑑賞』,社会思想社より再トレース・ 一部改変し作成。
- 第2図 五輪塔:近藤正1968「正林寺の五輪石塔群」『島根県文化財調査報告書』第五集,島根県教育委員会、宝篋印塔:(左)杉原清一1996「赤川流域の古石塔探訪」『宍道町歴史叢書』1,宍道町教育委員会、(右)間野大丞2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について-中世末から近世初頭を中心に一」『来待石を中心とした日本海文化』

石造物研究会第2回研究会資料、石造物研究会をもとに再トレース・一部改変のう え作成。

- 第3図 社日古墓:西尾克己・伊藤徳広・大庭俊次2001「古代から中世にかけての火 葬墓について Ⅰ『社日古墳』、鳥根県教育委員会、二反田古墓:杉原清―1987『二反 田古墓』、松江市教育委員会、正林寺石塔:近藤正1968「正林寺の五輪石塔群」『鳥 根県文化財調香報告書』第五集、島根県教育委員会、伝佐世伊豆守墓:杉原清一 1996「赤川流域の古石塔探訪」『宍道町歴史叢書』1. 宍道町教育委員会
- 第4回 経久寺所在石塔:中森祥2002 「鳥取県西伯町の来待石製宝篋印塔」『来待ストー ン研究』4,来待ストーンミュージアム、安田要害城跡:間野大承1992「五輪成出 十の石塔群について | 『松江考古』 第8号、松江考古学談話会、尼子経久墓・尼子清 定墓:今岡稔1996「山陰の石塔二三について-5-|島根考古学会誌第13集,島根 考古学会、小丸山古墳:中尾秀信·萩雅人1986『小丸山古墳群』、松江市教育委員会。 柴尾古墓:石川崇1996「柴尾古墓」『宮尾古墳群他発掘調査報告書』松江市教育委員 会·(財)松江市教育文化振興事業団、**松本修法壇跡**:横山純夫·近藤正1971「松 江·松本修法增跡 | 『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集,島根県教育委員会、谷 の奥遺跡:川上昭-2002『谷の奥遺跡』八雲村文化財調香報告書20,八雲村教育委 員会、奥才古墳群:三宅博士1985「第Ⅲ支群出土遺物」『奥才古墳群』, 鹿島町教育 委員会、興源寺内石塔・小早川正平墓:西尾克己・樋口英行2004「平田・小早川正 平墓と興源寺周辺の石塔について | 『来待ストーン研究』 5 , 来待ストーンミュージ アム、久戸千体地蔵仏:岡崎雄二郎1980「久戸千体地蔵仏」『宍道町埋蔵文化財調査 報告』2, 宍道町教育委員会、**金山五輪塔群**:西尾克己·稲田信2004「宍道·金山 五輪塔群について | 『来待ストーン研究』 5 , 来待ストーンミュージアム、善棚山古 墳群:間野大丞2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について-中世末から近世初頭を 中心に一」『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会第2回研究会資料,石造 物研究会・来待ストーンミュージアム客員研究会、神門寺境内廃寺:川上稔・西尾 克己1982『神門寺境内廃寺』出雲市教育委員会
- 第5図 (左)島根県教育委員会·大田市教育委員会2001『石見銀山-妙正寺跡-』石 見銀山遺跡石造物調査報告1,島根県教育委員会·大田市教育委員会、(右)善棚山 古墳群:間野大丞2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について-中世末から近世初頭 を中心に一」『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会第2回研究会資料、石 造物研究会

- 第7回 杉原清一1987『二反田古墓』、松江市教育委員会
- 第8図 近藤正1968「正林寺の五輪石塔群」『島根県文化財調査報告書』第五集,島根県教育委員会
- 第9図 間野大丞2000「宍道町岩屋寺所在の紀年銘のある宝篋印塔について」『来待ストーン研究』3、来待ストーンミュージアム
- 第10図 間野大丞2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について-中世末から近世初頭を中心に-」『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会第2回研究会資料,石造物研究会・来待ストーンミュージアム客員研究会
- 第11図 正林寺石塔:近藤正1968「正林寺の五輪石塔群」『島根県文化財調査報告書』 第五集,島根県教育委員会、社日古墓:西尾克己・伊藤徳広・大庭俊次2001「古代 から中世にかけての火葬墓について」『社日古墳』,島根県教育委員会、二反田古墓: 杉原清一1987『二反田古墓』,松江市教育委員会、岩屋寺境内石塔・久戸千体地蔵仏 ・尼子義久夫人石塔:間野大丞2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔についてー中世末 から近世初頭を中心に一」『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会第2回研 究会資料,石造物研究会・来待ストーンミュージアム客員研究会、谷の奥遺跡:川 上昭-2002『谷の奥遺跡』八雲村文化財調香報告書20、八雲村教育委員会
- 第12図 白粉石:近藤正1968「正林寺の五輪石塔群」『島根県文化財調査報告書』第五集,島根県教育委員会、来待石:間野大丞2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について一中世末から近世初頭を中心に一」『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会第2回研究会資料,石造物研究会・来待ストーンミュージアム客員研究会、西尾克己・樋口英行2002「広瀬・祖父谷丁石塔について」『来待ストーン研究』4,来待ストーンミュージアムを基に作成。
- 第13図 西尾克己・伊藤徳広・大庭俊次2001「古代から中世にかけての火葬墓について」『社日古墳』,島根県教育委員会
- 第14回 川上昭一2002『谷の奥遺跡』八雲村文化財調査報告書20、八雲村教育委員会

著者紹介

桶口 英行(ひぐち ひでゆき)

1980年 岡山県総計市生まれ

2003年 島根大学法文学部卒業

専 攻 日本考古学

研究テーマ 中近世の考古学的研究

- 1. 墳墓からみた中世社会の変遷
- 2. 貿易陶磁器からみた中世社会の階層性 など

報告 「中・近世の来待石石塔の分布について」『来待ストーン研究』4 2003

「広瀬・祖父谷丁石塔について」『来待ストーン研究』5 2004 (共著)

「平田・小早川正平と興源寺周辺の石塔について」『来待ストーン研究』5 2004 (共著)

宍道町ふるさと文庫19

白粉石・来待石の宝篋印塔、五輪塔 2004年3月31日 第一刷発行

著者 樋口英行

発 行 宍道町蒐古館

八東郡宍道町大字宍道1715-2

印刷 柏木印刷株式会社 松江市国屋町452-2

